



11月16日（金）に、気仙沼市立鹿折（ししおり）小学校で、第3回海洋教育子どもサミットが開催され、本研究所から2名が参加してきました。共通テーマは、「海に学び 海に生きる ー地域の学びから考えるつながりー」でした。

開会前に、地域の伝統行事である「波板虎舞」が、子どもたちを中心にしたバージョンで、披露されました。



開会行事の中では、日本財団の梅村海洋チームリーダーから、「グローバルな視点を持ちつつ、地域で海とどう向き合っていくか考え、実行して行ってほしい」という呼びかけがありました。



その後、実践発表に移り、各学校が取り組んできた海洋教育の成果を、ポスターセッション形式で発表しました。気仙沼市内の学校はもちろん、岩手県洋野町の学校や山形県加茂水産高校も参加して、それぞれ工夫して発表していました。発表の態度や声の大きさも立派でした。

続いて「振り返り」に移り、各グループに分かれて、ファシリテーターの先生のリードで、活発な話し合いが行われました。そして、各グループの高校生が話し合いの内容を発表しました。「森と川と海がつながっていることを感じた」「海のゴミの多くは家庭ゴミ、私たちの生活を考えていく必要がある」「世界とつながっている海とどう関わっていくか。海洋教育を深めていき、小さなことを積み上げていくことが大切」などの意見が出されました。



閉会行事では、東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センターの田中センター長が、「人は、他の人や生き物とつねにつながっているが、そのことをわすれてしまいがちである。海洋教育を行うことによって、そのことを思い出すことができるのではないか。今日学んだことを、家や学校でもう一度振り返ってみてほしい。それが新しい学びにつながっていく」という総括がありました。熱気にあふれるサミットになりました。



11月20日（火）に、上宮田小学校の5年生が、中央水産研究所の由上先生の「サバについての授業」を受けました。5年生は、松輪サバについてずっと学習を進めてきています。

スライドショーで、たいへん分かりやすく説明していただきました。サバは、伊豆諸島の回りで産卵することが多い、松輪サバは、瀬つきのサバといって、あまり回遊しない、サバの寿命は7歳くらいなど、知らないことがいっぱいありました。



その後、質問コーナーに移り、その受け答えで、サバは基本寝ない、夜は活動的になり、昼はボーっとしている、スコンバコリアスという新種のサバ（先日の観音崎自然博物館見学の時に、山田先生から聞いたらしい）が確認された、等のことが分かりました。

（文責 事務局長 渋谷）

海洋教育に関するお問い合わせは、みうら学・海洋教育研究所 854-9443 まで